

---

## IS ラウラの兄は過保護な能面

ラウラの弟になりたかった

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS ラウラの兄は過保護な能面

### 【Nコード】

N1496BA

### 【作者名】

ラウラの弟になりたかった

### 【あらすじ】

俺の名はラウル・ボーデイヴィツヒ。ドイツのクソみてーな所で生まれた、とある天使のお兄ちゃんさ……。

この小説は作者が『ラウラに兄が居る話して見た事無くね?』という思いつきで突っ走って行きます。ラウラがほとんどラウラじゃなくなるので閲覧注意です。

## プロローグ

俺の出生はクソみたいなものだ。ガラス管の中で発生して鉄の子宮に移され遺伝子操作やらなんやらを受けて生まれた。胎児には思考能力があるとかの実験で生後3日で言葉が話せるようになり、二週間後には歩けるようになった。そこから投薬と訓練漬けの日々。思い出していて思ったがアレは新薬の臨床実験もかねてたのかもしれない。

そんな俺がまともな容姿を得る事ができるはずも無く、まともな感覚もまともな考えも得られる事なんてある訳なかった。

簡単に言うと、俺は生まれながらの殺人者だった。殺す事が大好き過ぎてうっかり訓練で他の奴ら———— 勿論軍人———— をうっかり全員殺しちまったりとかしたが、貴重な実験体という事で処分は免れて来た。

薬品の所為か知らんが俺の髪の毛はその頃には既に真っ白、目玉は真っ赤になつていた。その頃はひよつとしたらストレスなんじゃ……とか思ってたが。

俺の脳味噌は必要以上に生存本能が強いらしい。その所為かは知らんが、俺は常にニコニコと笑っている人間になった。知ってるか、『笑い』って行為は元々威嚇のためにあるんだってよ。そのおかげで俺のあだ名は『笑う殺人鬼』<sup>キラー・ラハーン</sup>になつてた。

そんな俺にも妹ができた。妹と言っても、同じ研究所のたまたま同じ鉄の子宮から生まれたというだけで、血の繋がりなんざ1ミクロ

ンだって無かったが、俺はそいつを見た瞬間に『こいつだけは絶対に守る』という思いがこみ上げて来た。これが父性という奴だろうか？　そう研究所の俺の担当に聞いたら「それは君がそう設定されたからよ」と言われた。俺を造った事に関しては1ミリも感謝していないどころか憎んですらいたが、それを聞いて少しだけ感謝した。

妹も俺と同じように育った……訳ではなかった。性別が女だから、というのは多分関係ないだろうが、妹は普通の子どもと同じように育つらしい。これから随分可愛がってやろうと思っている。少なくとも、俺のようにはさせたくない。幸い俺は齡3歳にして既に伍長まで上り詰めている。それに、俺は貴重な実験体だ、上の連中は俺の言う事は大概聞くからな、妹は普通の子どもらしく育てさせたい

—— いや、無理か。あの鉄の子宮から生まれた以上は。が、せめて普通に—— 俺のようにではなく—— 育つ事が可能になるようにしよう。

俺の愛する妹—— ラウラ・ボーディヴィツヒのためには、俺——  
—— ラウル・ボーディヴィツヒはどんな事だっしてやるさ。

その日、俺はいつものように妹であるラウラと散歩をしていた。ラウラは遺伝子操作や胎児状態での実験が施されていないのか、3歳児としては秀でているが俺のように人間止めている訳ではないので危なっかしい時もある。うっかり転びそうな時は俺が駆けつけて助ける——— と思ってたんだが、研究所の職員から『獅子は我が子を千尋の谷に突き落とす』という諺を聞いてあまり助けられないようにしている。痛みを知っていれば、その痛みから立ち直る方法も知る事ができる。特にそれが子どもの時であればそう、大人になって初めて転ぶと立ち直れないらしい、と聞いた。そんな事になったら大変だ。俺の命はいつまで保つか分かったもんじゃないし、いつでも

ラウラと一緒に訳にもいかない。今は育児休暇取ってるけど、ラウラが6歳になったら多分軍のキッズスクールに入れられるんだろうし。そのことを前にラウラに言ったら――

「わたしは、おにいちゃんというっ！」

鼻血？ 違うよこれは愛が鼻から吹き出しただけさ。

閑話休題。

散歩から帰って来た俺は手を洗ってうがいをし（ラウラも一緒に）、食堂に向かった。俺は前までは汗臭い男子寮に入ってたんだが、ラウラと一緒に暮らすようになって女子寮に移った。で、男子と女子の待遇にビビった。

入った第一声が「部屋広っ！！」だったからな。男子寮は基本的に5人一部屋だ。それに比べて女子寮は二人で一部屋こうち。しかも一部屋が男子寮よりデカイ。ちよっとだけけどデカイ。その分天井は低いが、まだ6歳の俺と3歳のラウラには全く問題ない。

「おにいちゃん、はやくゴハンたべよ？」

「はいはいーい、ちよつと待っててラウラちゃん。今お兄ちゃん着替えてっからねー」

「あー、わたしもきがえるー」

「はいよー、それじゃバンザーイしてー」

「ばんざーい！」

よっこいしょつと。うーん、やっぱりいつも思うんだが、ラウラは可愛いよね。まさに純真無垢、汚れを知らない天使である。。  
亜麻色の髪と綺麗なスカイブルーの目、整った顔立ちはもうラウラを目に入れても痛くない位だ。

「はい、お着替えしゅーりょー。ご飯食べにいこっか」

「うんっ！」

そう言って俺の手を引っ張り元気に歩き出すラウラ。いつも通りスキップで鼻歌まで歌いつつ食堂に向かう。え、俺はどうしたって？

ラウラと一緒にスキップで食堂にGOさ。鼻血なんか出てないよ、これはラウラに対する愛だよ、愛。

今日もラウラが天使だった、まる。(前書き)

次こそは、次こそはラウラ隊長の口調もESも出すので、どうか今回だけはご勘弁を……！！

今日もラウラが天使だった、まる。

さて、そんなこんなで俺とラウラは食堂に入った訳だが、何分ここは大人用の食堂だ。いくら女性用——軍人の女って普通の男より食うかもしれない——とはいえ、三歳児と大六歳児の胃袋には多すぎるんだ、量が。そこで（ラウラが）思いついた案が——

「おにいちゃん、あーん」

「はい、あーん。うーん、おいしいよラウラちゃん」

「えへへー、ありがとうー」

二人で一つのセットを食べれば良いじゃないか。という事だった。確かに名案だが、俺の鼻血ダムが決壊寸前です。

が、そんなのんびりした風景がこの名物となっているらしい。目当ての4分の3はラウラであとは俺だとか。おかしい。明らかにおかしいだろう！ラウラの純真無垢で可愛い笑顔を見たいと思うのは分かる。が、何故能面のようなのっぺりしたいいつも変わらない俺の顔まで見るのだろうか。はつきり言っただ俺は自分をわざわざ見たいとは思わない。いつもニコニコした6歳児なんて気持ち悪すぎる。しかも見た目が9歳児って……。ガキの3歳って結構見た目に差が出てくるんだぜ。

気持ち悪い。いたらありやしない。

「しちそーさまでしたー！」

「よし、よく食べられたね。えらいえらい」

「えへへー、おにいちゃんはもうたべないの？」

「あー、うーん……そうだね、ごちそうさまでした」

「おにいちゃん」

「なんだいラウラちゃん？」

「えらい、えらい！」

「……（ツツー）」

「？ おにいちゃんはなぜでてるよ？」

おつといけない。つい出てしまったようだ。

「じゃ、お兄ちゃんはちょっと用事あるからラウラちゃんはお部屋で待っててね？」

「はい！」

そう言って部屋に向かうラウラ。あーあー、そんなに走ったらこけるぞー……

コロソッ

「あうっ……いたくないもん。ラウラはもうおっきいからいたくないもん……」

タタタタタ……

いや違うんだって、これは鼻血とかじゃなくてラウラに萌えた俺の血潮がうっかり出てきただけなんだって。

で、さっさと用事を終わらした俺は部屋に帰っている途中。用事の内容？ あー……回想入りまーす。

---

「さて、実験体の新型の調子はどうかね？」

「ええ、まあ……。最初の実験体のガードが固いのでなかなか実験や投薬ができないんですよ。成長や身体能力自体は遺伝子強化されてある事もあって順当なんですけど……」

「そうか。ならばその旧型を他の所に飛ばせば、例えば日本の北部訓場にでも――」

「誰を飛ばすって？」

「っひい！――」

「な、だ、誰だ貴様はッ！？」

「おいおいおっさん、アンタ自分が話の話題にしてた人間の顔知らなかったのかよ?」

「ま、まさか貴様が旧型ツ——!??」

「あつたり!。で?」

ラ ウ ラ に 何 を す る

っ て ?

「

「——ツツ!?!??」

「……」つ言っておくけど、ラウラに手え出したら、どうなるか分かんないよ? ……じゃ、お仕事頑張って下さいねー」

ま、ちょっと O H A N A S H I したら分かってくれたようだ。  
何より何より。

そんな事より少し遅くなってしまった。ヤバイヤバイ、早く帰らないと(俺が)寂しくて死んでしまう。

「ただいまー、ラウラちゃん、帰って来……た……」

「くー……くー……」

おそらく俺を待つていてくれたんだろう。イスに座って机に突っ伏して寝ている。おまけに涎までたらして……。

「もう、こんな所で寝てたら風邪引くって何度も言ってるのになあ……」

とか言いながらラウラをベッドまで運ぶ。内心全力でニヤけているけど、いつも通りのポーカニコニコ顔ーフフェイス。

「……ん、ううん……」

「お、ラウラちゃん起きたかな？」

……反応がない、ただの天使のようだ。

「……おにいちゃん……くー……くー……」

そろそろ皆分かって来たと思うけど、これは血ではなくおr(ry

今日もラウラが天使だった、まる。(後書き)

兄は基本的にはキラールハンです。

**愛すべき、愛でるべき天使を守る為 前編（前書き）**

今回は長くなりそうなので前後編に分けます。しかもオリキャラがまた出てきます。でもって今回と次回はラウラの出番が少なめになりそうです。みなさん、本当申し訳ありません……

## 愛すべき、愛でるべき天使を守る為 前編

あれから三年が経った。ラウラは軍のキッズスクールに入学、と同時に訓練も開始した。とはいえ元々の身体能力が高い上チートばりの伸びしろとそれまでに（俺が）教えて来た知識とかで同年代じゃトップの成績だそうだ。お兄ちゃんは鼻が高いよ。

ただ、訓練の教官の口調が移ったのかは知らんが昔より言葉遣いが少々男っぽくなってしまった。『おにいちゃん』と呼ばれなくなり『兄さん』になった日には枕を濡らした。

ああ、俺は正式に部隊配属となった。成績優秀者だからとか言ってたが、はつきり言って遣伝子レベルでいじってんだから成績優秀は普通じゃね？ とか思ったが気にしない事にした。

その日、俺とラウラは訓練も終わり、食堂で飯を食っている最中だった。

三年前と変わっていたのは、二人とも一人前の飯を食べるようになっていた位だ。俺としてはもっと『はい、あーん』がしていたかった……。

とか思ってた、その時だった。

『NOTFALL! NOTFALL!』

「ッ!!! 兄さん!」

「分かってるよ、ラウラちゃん!」

『緊急事態です、この基地のミサイルが何者かによってハッキングを受けています。基地内の隊員は速やかに退避して下さい。尚、特殊部隊隊員はそれぞれの持ち場に集合して下さい。繰り返します』

「じゃ、ラウラちゃん、また後でね」

「分かった。兄さんも気を付けて」

そう言って他の人に守られてシェルターに駆けて行くラウラちゃん。じゃ、俺も行きますか。ラウラちゃんを守るために。

「よう坊主、遅えじゃねえか!」

「悪いね、飯食つてたもんで。で、フツチー、今どんな感じ?」

「今はサイバー隊がハッキングを食い止めている所だ。が、それも精々時間稼ぎくらいにしかならないだろう。それとフツチーと呼ぶな、フリッツと呼べ」

「ってことは、俺等の出番が来るかもしれないって事か。しかも、今回は俺等だけで対処しろってことだよな、ヘルじい」

「ま、そう言うこつたな。ガハハハハハ!」

「笑っている状況ではないのだがな……」

持ち場に来たのは結局3人。つまり、ドイツ軍に取ってはここがそれだけ重要な基地だって事だ。

超特殊部隊、『ホムンクルス』。俺が所属するこの部隊は隊員全員

が投薬やらナノマシン注入やらで他の普通の奴らとは一線を画する、  
言ってみれば化け物を集めた部隊。全員が一個中隊を殲滅できるレ  
ベルの戦闘力を持つ。しかも全員が全員戦車でも戦闘機でも潜水艦  
でももう何でも操縦できるという規格外な部隊。俺はその最年少  
隊員にしてまさかのエース。ま、遺伝子からいじってる奴は俺しか  
居ないから当然といえば当然かもしれん。

「……連絡だ、サイバー部隊がそろそろ陥落するらしい。せめてミ  
サイルを落とせ、と言って来たがどうする？」

これは別に命令を聞くか聞かないかを聞いている訳じゃない。

「ウチには何本あるんだっけ？」

「150だな、確か」

「じゃ、丁度良いし一人50ずつってことでー」

「了解した」

「ハッハッハッ、さっさと終わらせて飲み行くぞフリッツ！」

「貴方と飲みに行くのは遠慮したいんだがな、ヘルベルト……」

そう言つて全員パイロットスーツに着替える。今回一番楽なのは戦  
闘機だし。

「じゃ、今日も元気に頑張りましたよー」

……

「え、無視？」

……



『続いてヘルベルト機、射出準備完了、発射タイミングをヘルベルト・バウムガルテンへ』

『了解じゃー！ ヘルベルト・バウムガルテン、出撃！』

「あーあー、聞こえますかお二方ー？」

『さっき確認しただろう』

『ま、そう言うなフリ坊。ラウルも心配なんじゃろ。なんせ、今は儂等のリーダーじゃからの！ ハッハッハッハ！！』

「そーゆー事ー。じゃ、後30秒後にミサイルが発射されるらしいから、相対速度を合わせつつ迎撃でー」

『質問だが、ミサイルは何処をロックしているんだ？』

『おお、そう言えばそれを聞いておらんかったな。ラウル、儂等は一体何処まで行くつもりなんじゃ？』

「はーい、今回俺たちが さーい・あーく 行くのがー……」

「日本でーす！」

『ちーちゃん、そろそろそっちにミサイルが行くから頑張っ  
てね！』

「分かっている。私がやらないと……」

くっ、束の奴、私にこんな大変な事をさせるなど……。

だが、まあ良い。全日本剣道大会、女子一般の部優勝者の実力、見せてやるうじゃないか……！

『警告、七時の方向より熱源接近。数三、距離300』

来たか。そう思ってISのハイパーセンサーで確認する。だが、数が3？ ミサイルにしては随分少ないような……まあ、最初はこんなもんか。

そう思って顔を向けて目視した先には、予想しなかった物が存在していた。

side out

さて、結局ミサイルはサクッと撃ち落とし、ついでにミサイルが狙った場所まで行け、なんていう指示が出されちゃって、今は日本



愛すべき、愛でるべき天使を守る為 前編（後書き）

やっと次でまともにISが出せる……！

あ、それとこんな小説を読んで下さっている皆様に質問なのですが、ラウラが一夏を攻略するってありですかね？ できれば感想にでもチヨコチヨコツと書いて下されば作者が泣いて喜んで飛び跳ねます。

誤字脱字や文法的に間違っている所やその他指摘など、勿論感想もお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1496ba/>

---

IS ラウラの兄は過保護な能面

2012年1月6日03時52分発行